

令和二年報恩講法話

幸せについて

正信寺 釋英和

令和二年十一月二十三日 正信寺 報恩講 法話

幸せについて

釋英和

【はじめに】

本日は、お忙しい中、お参りいただきまして、ありがとうございます。春のお彼岸の頃は、新型コロナウイルス蔓延の最中で、今後の生活がどうなってしまうか心配になりました。反面、半年もしたら落ち着いているのだろうという、ほのかな期待もありました。残念ながら、新型コロナウイルスは落ち着いたとは言えません。

ゴールデンウィークやお盆の休みでも、旅行や外出も自粛という世相で、食事会や飲み会なども制限されてきました。感染しないように、できることができないというイライラが世の中を覆いました。

本日は、その中で幸せについてお話したいと思います。

【自衛警察に怯える不幸】

新型コロナウイルスが流行してから「自衛警察」という言葉がマスコミを賑わせました。正義感はあるのですが、法律や人権を無視して人を攻撃することが起きました。

私の近所でも、長野在住のお母さんが亡くなって、実家を整理し、処分しなければならなかったため長野に帰省した時に、横浜ナンバーの車に傷をつけられた方がいました。

都会から帰省する人は、コロナを持ち込むとして敬遠したい気持ちもわからないでもないですが、事情も知らず他人を攻撃するのは、いかななものかと思いました。

先日、江の島付近の海岸線で、フロントガラスに「鎌倉在住です」と段ボールに書いて掲げている練馬ナンバーの車を見かけました。

こうした世相を受けて、「県内在住です」というステッカーや喘息で咳をしやすい人に「私は喘息です」と書かれたTシャツも、インターネットで販売されているようです。こういったTシャツを着なければならぬということも不幸なことだと思います。



【寛容でなくなり人を攻撃する不幸】

自衛警察の人から直接聞いたわけではありませんが、自衛警察の本人たちは正しいことをしていると思っただけだと思います。おそらく、「周りの人は自粛しているのに、なぜ、そうしたことをするのか」という同調圧力をかけているのではないかと思います。つまり、他人が、自分の考えに従った行動をすることが、世間を安らかにできると信じているのだと思います。

その面で、他人に寛容になれない人が増えてきているのではないかと
 思います。自分と考え方の違う人の存在自体を否定することで、安心で
 きる人がいるのではないかと思えます。特に、日本人はお上が要請する
 と、整然と従わなければいけないという気質があるように思えますので、
 その要請に反することは理由の如何を問わず、攻撃したくなるのではな
 いでしょうか。

それぞれの人の事情や、そういった行動しなければならなかったのか
 という思いやりの配慮ができないのだと思えます。仏教では、人々に慈
 悲の心がなくなってきたというのかもしれない。

慈悲の心というと、一般的な日本語としては、目下の相手に対する「あ
 われみ、憐憫、慈しみ」(mercy) の気持ち表現する場合に用いられます
 が、仏教では、元来、四つある四無量心(四梵住)の徳目「慈・悲・喜・
 捨」(じ・ひ・き・しゃ)の内、最初の二つをまとめた用語・概念で、本
 来は慈(いつくしみ)、悲(あわれみ)と、別々の用語・概念です。

慈はサンスクリット語の「マイトリー (maitrī)」に由来し、「ミトラ
 (mitra)」から造られた言葉で、本来は「衆生に楽を与えたいという心」
 の意味とされています。

悲はサンスクリット語の「カルナー」に由来し、「人々の苦を抜きたい
 と願う心」の意味です。大乘仏教においては、この他者の苦しみを救い
 たいと願う「悲」の心を特に重視し、「大悲 (mahā-karunā)」といます。
 これはキリスト教などのいう、優しさや憐憫の想いではありません。
 仏教においては一切の生命(衆生)は平等です。楽も苦も含め、すべての
 現象は縁起の法則で生じる中立的なものであるというのが、仏教の中心
 となる概念なのです。

昔を懐かしむわけではないですが、近所付き合い、親戚付き合い、会
 社の運動会や飲み会、子供の父母会などといった付き合いが疎まれ、人
 と人との関係が希薄になると、他人の意見を聞く機会が減ってきて、自
 分と異なる意見を持つ人との妥協点を見つける作業が減ってきたよう
 です。慈悲の心も、持とうと思っただけでなく、人とかかわりを多
 く持つことで育まれるのではないかと思っています。

ネット社会は、情報が多方面から入ってくるようで、個人が見ている
 情報はその人の嗜好やよく見るサイトに偏っていたりします。また、匿
 名社会ですので、自分の意見を SNS で押し付けあい、他人を口汚い言葉
 で否定することに対して心理的ハードルが低くなります。炎上するとい
 う言葉も使われますが、相手の人格を尊重する姿勢失われているのでは
 ないかと感じます。他人の立場に立って考えるという思考回路が、ネッ
 ト社会では失われていくように思います。

新型コロナの蔓延で、そうした風潮が加速されているようにも思えま
 す。個人への配慮が不足して、相互に理解できなくなり、苛立ちを感じ、
 不幸に感じてしまうことがあるように思います。

【二河白道のたとえ】

善導の『観経疏』散善義三心積中の回向発願心積において説かれてい
 る譬喩に二河白道という教えがあります。過去からの善根功德を回向す
 ることによって往生浄土が成就されることに対して、たとえ異見・異学・
 別解・別行の者によって否定されたとしても、決して動乱破壊されるこ
 となく、一心に往生を信じて有縁の行を實踐していく堅い決意を持つべ
 きことを説き示した譬喩譚です。



もう少し、説明します。

ここに西に向かつて百千里の道を歩いて行く者がいます。その人の前に突然河が現れます。南には火の河が燃えさかり、北には水の河が渦巻いています。河の幅は百歩ほどであるが、底も見えず南北は果てしなく水火がつづいています。水火の分かれ目に一本の白道が西岸まで通じているのですが、その白道はわずか四、五寸ほどの細さで、しかも火焰と波浪が常に襲いかかり、対岸に渡るには危険で、人の恐怖心をあおります。また、

らば、目の前に道があるので、この道をまっすぐに進んで行こうと意を決しました。すると、東岸からは、「この道をまっすぐ進んでいきなさい、死ぬことなどはありません。もしここにとどまれば必ずや死んでしまうでしょう。」と語りかける声がありました。また西岸からも、「心を定めてただちにこちらに渡ってきなさい。お前を守護してあげよう。水火の河など恐れてはならない。」と語る声でした。東からは「行け」と、西からも「来い」という激励の声がしたので、疑いや不安な気持ちは消えさり、決然と白道を進んでいった。すると、東岸から賊徒や猛獣たちが、「戻ってきなさい、その白道は危険で悪しき道だから渡りきればしない。我われに悪しき心などはないのだ」と引きとめようとするが、そうした誘惑の声にも決して振り返ることもなく白道を進んでいくと、すぐさま西岸に渡りついて、諸難に遇うことはなかったのです。

以上が二河白道の内容です。これは、東岸は娑婆の火宅、西岸は阿弥陀仏の極楽、群賊悪獣は衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大にたとえ、水火の二河はそれぞれ貪愛と瞋憎、白道とは衆生の清浄な願往生心、白道を渡って西に進むとは善業を回向して往生を願うことにたとえ、そして東岸の声とは積尊の發遣、西岸の声とは阿弥陀仏の招喚にたとえられるといえます。

阿弥陀仏の声に従って信じたことをしなさいという、この回向發願心の譬えを聞くと、誰に何を言われても、回向された功德いただけば良いと言うことが頭ではわかるのですが、良かれと思って自衛警察になっってしまう人の行動との違いは、どこにあるのか、区別がつかない方もいるのではないのでしょうか。

後を振り返れば多くの賊徒や悪しき猛獣たちがこちらに向かつてきています。そこで人は次のように思いました。西へ向かえば西岸に渡る白道があります。しかし対岸は遠くないとはいえ、この白道は渡るにはあまりにも幅が狭く、足を踏み外せば確実に死んでしまうでしょう。東に引き返したとしても賊徒や猛獣たちが群れをなして襲いかかってくるわけで、南北に逃げようとしたところで、やはり賊徒と猛獣が向かってくるでしょう。その人は、引き返しても、ここにとどまっても、そしてこの道を前に進んで行くにしても、結局のところ死は免れそうにない。それな

私の考えでは、行いの動機に貪瞋痴の瞋欲、すなわち怒りや嫉妬がき

っかけの行動になっているか、いないかということが大きな違いになるのではないかと思います。また、相手の苦を除き、幸せにする気持ちで行動すれば良いのではないかと思います。

【普通であることの幸せ】

ブータンという国があります。いまでも、王国です。ヒマラヤ山系にあり、中国とインドに国境を接しています。長年鎖国をしていましたが、1971年に国連に加盟しました。国教はチベット系の大乗仏教です。

ここで話したいのは、ブータンは経済的には決して豊かとは言えない国ですが、2005年の国勢調査では国民の97%が「私は幸せである」と答えています。GNH (Gross National Happiness) を提唱し、GNP (国民総生産) で測られる経済的な成長よりも、国民の幸せ度を上げることが政府が重視していることが大きな特徴です。

ブータンは、近代化はするけれど、西洋化はしないという方針を取っていて、学校など公の場では民族衣装の「ゴ」「キラ」を着ることが勅令で定められています。自分たちのルーツを常に忘れないようにすると同時に、手仕事で作られる民族衣装を日常的に使うことで、民族衣装に使われる各地の織物の伝統を守っているのです。ゴは日本の「どてら」に似た民族衣装で、国王も着ています。

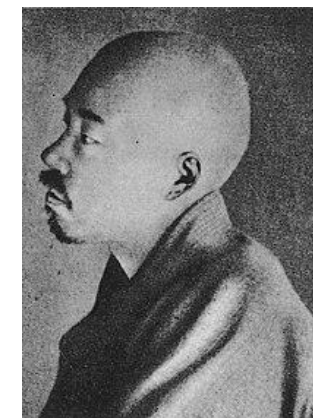


殺生を禁じている宗教上の理由と、資源保護の観点から、川で魚を取る事を禁じており、食用の魚は川の下流にあたるインドからの輸入に頼っています。

国民からの尊敬と人気と注目を常に集め続けている国王という絶対的リーダーの下、「医療や教育が無償で平等に提供されている」という福祉の厚さ、そして信仰心。こうしたことが、ブータン人自らが幸福だと感じる理由の一端といわれます。「一日三食食べられて、寝るところがあって、着るものがあるという安心感」、それだけで満ち足りていて幸福だと思えることがブータン人にとっての幸福につながっているのです。

ところが、そのブータンも借金をして携帯電話、テレビや家電製品を買ったりすることが広まり最近では幸福度が下がったといわれています。経済的に豊かな生活や先進的な生活が、人々に必ずしも幸せを与えているとは言えないようです。

【できる幸せ】



八月九日の日経新聞の日曜版「日経STYLE」に正岡子規のことが掲載されていました。私の知っている正岡子規は、どちらかというと俳人としてみずみずしい感性を持っていること、そして、野球が大好きな人というイメージです。上野恩賜公園にある野球場は正岡子規記念野球場と命名され、正岡子規を含めたメンバーが日本で最初に野球をした場所とされています。雅号を幼名の升(のぼる)にあやかっって野球(のぼる)と改めたこともあるといわれます。

皆さんも「柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺」という正岡子規が詠んだ俳句をご存じのことと思います。

正岡子規の子規はホトトギスのことで、結核を病み喀血した自分自身を、血を吐くまで鳴くといわれるホトトギスに喩えたものといわれます。晩年、結核菌が骨を溶かす脊椎カリエスという病に伏し、明治三十五年九月十九日三十四歳の若さで他界します。

脊椎カリエスというのは、背中が痛くて、座っていることもできない病といわれています。

明治三十四年、亡くなる一年前には死を覚悟していたといえます。「仰臥漫録」と題した日記に、小刀と千枚通しの墨絵を書き、「古白日来」、すなわち古白というピストル自殺した従兄がこちらに來いと言っている、と日記に書いています。このころは、死の恐怖に暗い気持ちになっていたようです。

ところが亡くなる年の六月「病床六尺」という日記の中で、「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬることかと思っていたのは間違ひで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居ることであった」と書いています。脊椎カリエスに罹った自分を客観的にみて、限られた中でよりよく生きようとしているように見えます。

七月二十六日付の日記では、「病気の佳境処しては、病気を楽しむといふことにならなければ生きて居ても何の面白みもない」と前向きで、開き直ったとも思えますが、達観した気持ちになっただけのことか伺えません。

そして亡くなる一か月前、八月六日付の日記では、「このごろはモルヒネを飲んでから写生をやるのが何よりの楽しみとなつてゐる。・・・草花帖がだんだんに書き塞がれていくのがうれしい」とあり、痛みを抑える薬を飲みながらも絵を描けること、画集が埋まってくことに喜びを感じています。

正岡子規にとつて、痛みを耐え、動くこともできない、限られた世界の中でも、やりたいことやっていくこと、できることをできることが、幸せなのだと思えました。新型コロナウイルスの時代に、よりよく生きていくヒントが隠されていると思います。

【幸せをつかむ行動】

親鸞聖人は、ご自分のことを記録に残していません。私たちが知る親鸞聖人の消息の多くは、弟子や家族が書き残した書物や手紙です。

ところが、元久二年（1205年）四月十四日、親鸞聖人は『選択本願念仏集』（『選択集』）の書写と、法然の肖像画の制作を許されたことを、『顕浄土真実教行証文類』（『化身土巻』）の後序に自ら記載しました。法然上人は『選択集』の書写を、門弟の中でも弁長・隆寛などごく一部の者にしか許さなかつたので、法然上人の元へ入門してわずか五年後に、早くも親鸞聖人は法然上人から囑望される人物として認められたといえます。

『選択集』の書写を許されたことがどれだけ嬉しく、幸せだったか想像に余りありません。だれもが書写を許されていたら、たぶん、教行信証に「書写が許された」「まことに喜ばしい」と書くことはなかつたと思います。

親鸞聖人が、法然上人に『選択集』の書写を許されるまでの道のりを考えると、五年間親鸞聖人が行ったこと積み重ねが法然上人に評価される実績として映り、信頼されたからという事は疑う余地がありません。

自分の目の前にあること、これは、仏さまが与えてくれたことです。で、逆境であつても、順境であつてもコツコツとやりきること、これが幸せをつかむことではなかったかと思えます。そうした積み重ねがあったからこそ、書写を許される幸運も生まれてきたのではないかと思えます。

他人がやってくれない、助けてくれないという思いを持つ人も多いですが、今、自分に与えられたことは何かを考えて、できる範囲できちんとやること、新たなチャンスをつかむような幸せにつながるのではないかと思います。

【アランの幸福論】

世界三大幸福論としても有名なアラン『幸福論』は皆さんご存知でしょうか。

よく幸福論という言葉や話題を耳にするようになった近代では、割とメジャーになってきたアランの幸福論ですが、まずはその内容について簡単におさらいしてみましよう。

アランは幸福や不幸は自然と降ってくるものではなく、自分で作り出すものだと考えています。不幸に感じている人は得てして周囲や環境に原因を求めがちですが、実は自分からマイナスの方向にばかり考えてしまい、結果として不幸を呼び寄せてしまっていると考えのです。また、そうした上で、幸福になるためには、自分の不幸を他人に話すようなことはしてはならないといっています。

これは、自分が他人から与えられるものは、自分が他人に施したもの

の裏返しであると言う考えに基づいています。

親鸞聖人が『選択集』の書写を許されたことは、まさにそういうことだと思えます。

【おわりに】

最後に話を二河白道のたとえに戻します。

考えの違う者によって自分を否定されたとしても、決して心乱されることなく、一心に往生を信じて有縁の行を実践していくということ、これは、強い意志がないとできないことかもしれないと私は思います。

しかしながら、二河白道の立場に自分が立つたら、西の岸からの声を聴くことも重要ですが、貪瞋痴に惑わず、自分の足を踏み外さないように一歩一歩進めること、この積み重ねが西の岸にたどり着く唯一の行いだと思えます。すなわち、目の前に与えられた、できることをやるという事が大切だと思えます。

私たちが極楽浄土に往生したいと思つたら、菩提心や慈悲の心を持つという大きな目標も大切ですが、できることは、まず、念仏を唱えることではないかと思えます。朝目が覚めて、生かされていることを感じ、その感謝の念仏を唱えられること、すなわち、まず目の前に与えられたことをできることに幸せを感じられるようになりたいと思います。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

浄土真宗

安養山 正信寺